

医療者・処置に対して“こわい”と感じる 患児の恐怖心を和らげる看護を提案します

小児看護学実習20年1月28日(月)～20年2月15日(金) 本館4階

あじさい看護福祉専門学校 看護学科 N0631 三品 絢

背景

今回、私は小児看護学実習で川崎病のため母子入院となった3歳1ヶ月の男児Rくんを受け持った。Rくんは今まで大きな病気にかかったことがなく、今回が初めての入院体験となっており、入院当初は慣れない環境の中での療養生活と、健康障害そのものからくる倦怠感から激しく啼泣する姿がみられた。また、医療者が行くたびに“ねむい、ねむい”と泣きながら訴える様子があり、Rくんが医療者・処置に対して恐怖心を抱いていることを感じた。

健康障害を伴う患児は健康障害そのものや、療養生活を通じてさまざまな“こわい”思いをしている。そのため、患児の苦痛や不快感の軽減をはかる関わりがとて大切になってくる。そこで私は、Rくんのように医療者・処置に対して恐怖心を感じている患児が少しでも笑顔で療養できる看護を提案したいと考えた。

問題点

Rくんは、聴診器・血圧計など見たこともない医療器具で何をされるか分からないまま処置を受けている。そのため、医療者・処置に対して怖がっていた。幼児期の知的機能の特徴は、ものごとを頭の中で再現して、あるものを別のものであらわすといった象徴機能が発達し、具体的思考である。これは、周囲の出来事を整理し、経験したことを抽象的・論理的に考えるための重要な手段となる。そのため、治療・処置前に行われる簡単な説明だけでは、患児は理解できない。このままの状態ではRくんが処置を受け続けると、幼児期の発達課題の自律対疑惑・恥の“自律心”が上手く獲得できない恐れがある。

具体的関わり

—実践①—

1月29(火) 9時30分

聴診を「お胸の音聞かせてね」という声かけのみで行おうとした。

Rくんの反応

聴診器を見ただけで泣く。母に抱きつく。

児の反応から聴診器がどんなものかわからないため、聴診器を見ただけで恐怖心を抱いてしまうことがわかった。

1月29日(火) 16時

母「もうすぐうーたんやるよ」

Rくん「うーたんやるの？」(表情明るくなる)

母児の会話を聞いて、児が好きなキャラクターを知る。今まで暗い表情をしていた児が一変し、明るい表情になったことから、児の好きなキャラクターを看護に取り入れていくことで児が受け入れやすくなるのではないかと考えた。

1月31日(木) 14時

ノントンの本の読み聞かせ



Rくんの反応

最初は集中して本を見ていた。しかし、途中で興味がなくなり、そっぽを向いてしまった。

Rくんの反応から、絵本で伝えていくことはRくんにとっては伝わりにくいことがわかり、その他の方法で伝えていくことを考えた。

実践①を踏まえて以下のような方法を考えた。

* 具体的対策 *

医療者・処置への恐怖心が軽減できるように・・

- ① 母子の会話から得られたRくんの好きなキャラクターを看護に取り入れる。また、ベッドサイドにあるものからRくんの好きな物を知り、看護に取り入れる。

⇒聴診器にキャラクターを貼り付ける、薬袋に患児の好きなキャラクターのシールを貼る

- ② 児への説明を行う際にごっこ遊びを取り入れる。

⇒聴診器・血圧計など児が怖がっている医療器具に実際に触れてもらうことで、怖いものではないことを知ってもらう。

患児の発達課題である“自律心”が獲得できるように・・

- ③ 日々の頑張りを目に見える形にして残し、頑張りを認め、褒める。

⇒聴診器に貼ったキャラクターの絵を聴診後に渡し、病室に貼る。また、検査を頑張って受けられた際に渡す。ステッカーを貼る際に「Rくんが頑張ったからたくさん増えたね！すごいね！」と声かけを行い、発達課題である“自律心”を育めるようにする。

— 実践② —

1月31日（木）①、③の実施

- ① 母子の会話から得られたうーたんを聴診器に貼り、聴診する。薬袋にRくんの好きな動物シールを貼る。
- ③ ステッカーを病室に貼る。⇒2月1日（金）に増えたステッカーを褒める。



(①児に使用した聴診器)

①に対するRくんの反応

Rくんがうーたんに興味を持ち、聴診時うーたんをじっと見ていた。聴診後、うーたんをRくんにあげると「ありがとう」と明るい表情でこたえてくれた。
⇒児が聴診器に対する恐怖心を軽減させることができ、効果的だった。

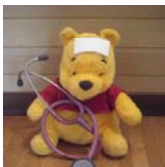


(③病室に貼ったステッカー)

③に対するRくんの反応

「Rくんが頑張ったからたくさん増えたね。すごいね！」という言葉かけを行うと、自慢げな笑顔を見せてくれた。
⇒Rくんの反応から、日々の頑張りを目に見える形で残し、頑張りを認め褒めていくことで、児の自尊心・自律心を育むことにつながり、効果的であることがわかった。

2月4日（月）②を実施



(②ごっこ遊びで利用したもの)

②に対するRくんの反応

聴診器に興味を持ち聴診器で医療者がRくんに行うように人形の胸を聴診する姿があった。笑顔で楽しそうに実施する姿があった。
⇒児に馴染みのない医療器具もごっこ遊びにして児に受け入れやすい形にすることで、普段自身に行われていることに対する理解が得られることがわかった。

* 具体的な提案 *

- ① 患児のベッドサイドや、母児の会話に耳を傾け、児の興味を持っているものを知り、看護に取り入れる。
患児が怖がっているもの（医療器具）に児が好きなキャラクターのステッカーを貼り、恐怖心を軽減させる。
- ② 児への説明をする際にごっこ遊びを取り入れながら行う。
児が怖がっているものに実際に触れてもらいながらごっこ遊びを行うことで、児が遊びを通して治療に対する恐怖心が軽減できるようにする。
- ③ 日々の頑張りを目に見える形にして残し、頑張りを認め、褒めることで3才児の発達課題“自律対疑惑・恥”の自律心の獲得を支える。
児が頑張って処置を受けられた際に頑張りを褒め、ご褒美として児の好きなキャラクターのステッカーをプレゼントする。また、ステッカーを病室に貼り目に見える形にして残していくことで、児が「がんばったんだ！」という達成感を得られるようにし、自尊心と自律心の獲得を支えられるようにする。